

性情報に流されず 自分で選ぶ力を

「性と生」の授業を28年 東京・大東学園高

「性教育」を28年実践してきた高校がある。東京都世田谷区の大東学園高校。「総合的な探究の時間」を使い、1年生が週1コマ、1年を通して「性と生」について学ぶ。生徒は何を学び、どう受け止めているのか。昨秋から同校に通い、授業を見せてもらった。

「今日のテーマは性感染症です」

昨年11月、1年G組の授業で、「性と生」の教科主任を務める荻野雄飛教諭(33)が、プリントと東京都作成の性感染症の冊子を配った。生徒たちは興味津々で冊子のページを繰った。

荻野教諭がプリントの問いを読み上げる。「問い1。症状が出ても放っておいた人が25%もいる。なぜ？」。生徒たちはそれぞれ考えをタブレット端末に書き込む。

「恥ずかしいから」「大丈夫と思っている」「面倒くさい」「事実から目を背けている」……。生徒たちの意見が匿名で教室前方のモニターに映し出された。



荻野雄飛教諭

荻野教諭は「性感染症は簡単には治らない。友だちから相談されたら、早く病院に行くように言っておいてね」。つきあっている人と一緒に治療することが大切、とも付け加えた。

その後、二つの質問を投げかけた。「問い2。感染しないためには何ができるか？」「問い3。もしパートナーが『コンドームを勝手に性行為をしよう』と言ってきた場合、なんと言うか？」。生徒たちは再び考えをタブレットに書き込んでいった。

大東学園高校の「性と生」は、女子校だった1996年度から始まった(2003年度に共学化)。あふれる性情報に流されるのではなく、自分で生き方を選ぶ力をつけてもらう狙いだった。23年度は教員8人が男女でペアを組み、授業を実施した。

学びは、性の多様性、受精、妊娠と避妊、中絶、出生前診断、人間関係と暴力、性的同意、性の商品化、ジェンダーなど多岐にわたる。ある日の授業では、女子高校生がトイレで男児を出産し、殺害した疑いで逮捕されたことを伝える新聞記事を読み、なぜそ



大東学園高校の「性と生」の授業。避妊の方法について学んだ生徒たちは班に分かれ、コンドームをじかに触った
2023年10月、東京都世田谷区

感染症・コンドーム…触れ考えた 「びっくりしたけど役に立つ」

んなことになったのかを考えた。

川崎志織さん(16)は「最初はこんなに細かくやるんだとびっくりしたけど、結構好きな授業」と振り返る。初めて知ることばかりで、「将来に役立つ。ちゃんと聞いといた方がいいと思った」。

橘真里亜さん(16)は最初は恥ずかしい思いが強かった。しかし、先生が真剣に淡々と話していく姿に、夏ごろには恥ずかしさは小さくなったという。「中絶の話も、性の商品化の話もすごく考えさせられた」

一方で、性に関するストレートな表現が苦手な生徒もいる。池田大飛さん(16)は「知識としては大切だと思うけど、かなり抵抗感があった」と吐露する。コンドームを実際に触る授業も、仲間はノリノリだったが、ついていけなかったという。

荻野教諭は、嫌悪感を抱いたり、聞きたくないと感じたりする生徒を常に意識しているといい、「コンドームに触れる授業などは、嫌な生徒は拒否できる環境が大切」とする。一方で、「触れたことも見たこともないものを、いざという時に使うように言っても難しい。抵抗感を減らしておく狙いもある」とも話した。

授業では、社会と人のつながりや社会構造も学ぶ。荻野教諭は「授業を通じて、『男らしさ』『女らしさ』など、社会にある『こうあるべきだ』を問い直すきっかけにもなれば」と語った。